



# T O K Y O R O P P O N G I R O T A R Y C L U B

東京六本木ロータリークラブ



「ロータリーは分かちあいの心」

～Rotary Shares～  
国際ロータリークラブ会長

発行日 2007年12月17日

No. 19

「一歩一歩進もう」

～Let's Move Forward Step by Step～  
東京六本木ロータリークラブ会長

## W E E K L Y R E P O R T



平成19年12月3日  
卓話 『ロータリーにできること』

俳優

(社福) 世田谷ボランティア協会 名誉理事長  
NPO法人 チャイルドライン支援センター 代表理事  
牟田 悌三 様



皆さんこんにちは。牟田悌三でございます。私ロータリーにお世話になって34年たちます。私のいろんな活動のきっかけは、10周年記念事業に子供のことをやってみたくと思ったことです。そのころ子供たちを見ておると意欲を感じられないんですね。これは生活が豊かなせいだと、子供に不足というものがあることを伝えなきゃいけないと思い当たったのがハンディキャップという不足。不足を持った方々と中学生、お付き合いをしてもらえれば、なんか感じてくれるに違いないと、世田谷の公立中学校に1校、1校お願いして61名の中学生に参加いただきました。

半年の活動で全体会を3回持ちました。最初、野外炊飯で盛り上がり、2回目はやがては自分たちの故郷になる世田谷をもっと知ろうじゃないのと歩いて回りました。最後は、その発見を発表し合う体験発表会。中学生諸君はいろんなことを発見してくれました。その中で野球ばかりやっている班があったんです。その班には肢体不自由のお子さんがいて立つことができない。そのお子さんが野球やろうよっていうのでみんな困っちゃったんだけど、じゃあやってみようって。バッテリーボックスで座ったまま打つ、当たらない。そしたらあるお子さんが家に飛んで帰って持ってきたのがテニスのラケット。それで当たるようになった。彼が打って代走が走ったら当人がつまんなそうな顔してる。そうか打つだけじゃつまないよなって言ったら、あるお子さんが這ってもらえばいいじゃないって。そうだよなって一塁までの3分の1ぐらいの所に線を引いて、打ったらそこまで這って行って、一塁に投げるタイミングでアウト、セーフにするとかいうふうルールを作りながら野球をした。這ってもらうなんて我々大人は口に出せませんよね。でも純粋な彼らは、こいつはそれでも参加することを喜びと考える。メンバーが最後の体

験発表会で感動しちゃってね。あの中学生在最後に、生きてるって素晴らしいという歌を肩組んでぼろぼろ涙流しながら歌っている。やったーと思ったんですけど、次の瞬間、我々は何をやってきたんだろうって反省しました。しらの中学生とかいうけど、場を与えればこんなに感動するじゃないか。この活動、10年間続けました。この10年で自分のボランティア感が形作られた気がします。

ロータリーで言うサービス、日本では奉仕ってことで、してあげるってことが強調されるけど、私はいただくことを考えました。自分ではわからなかったことがいっぱいあります。一つ申し上げると知的障害のお子さんと一緒に歩いたとき、彼は立ち止まったり道草を食ったりなんですね。私は、みんなから遅れちゃうって私のペースに巻き込もうとして、そうか、人間立ち止まっても生きていけるんだと気づかせてもらいました。振り返ってみたら私はもう毎日毎日走って生きている。立ち止まったらみんなに先に行かれちゃうみたいな強迫観念すらあったけど、立ち止まってみたら景色がよく見えるんです。こんな近くにこんな美しいものがあったとか。ですから私のボランティアは双方向。いただくという姿勢を持てるようになって、少し幸せになった気がします。

ロータリークラブって毎週、あらゆる職業の方々が集まってる。その気になればもっともっと頑張れるはず。子供の問題やっておりますと、行き着くところは大人です。大人が変わらなきゃ子供は変わらない。そういうロータリアンが先頭に立っていただければと考えます。今こそ皆様の出番であります。

